



憶えきれないせりふ、 芥川比呂志

おぼ
憶えきれないせりふ

著者／芥川比呂志（あくたがわひろし）

●
印刷／昭和57年10月15日

発行／昭和57年10月20日

発行者／佐藤亮一

発行所／株式会社新潮社

郵便番号162／東京都新宿区矢来町71／振替東京4-808

電話・業務部03(266)5111・編集部03(266)5411

●
印刷所／株式会社三秀舎

製本所／株式会社大進堂

●
定価／1300円

©Ruriko Akutagawa Printed in Japan, 1982

乱丁・落丁本は、御面倒ですが小社通信係宛御送付下さい。送料小社負担にてお取替えいたします。



憶えきれないせりふ・目次

「サド侯爵夫人」再読		67
再演の前に	69	
精神病院のハムレット	71	
衣裳の演出	77	
V		
テレビの時間	84	
戦後のフランス映画	108	
全力疾走	111	
夜明けの寄席	114	
VI		
深夜のCM	118	
VII		
暖かい冬	120	
床頭の影	125	
VIII		
夏のだる	130	
動物小劇場	132	
私の好きな女性	140	
取っておきの店	142	
私の五〇〇〇一枚	144	
役づくりの工夫	147	
IX		
アトリエの出来たころ	150	

[illegible]

ねがい 214

夜あけの手紙 215

喪の部屋 216

断章 218

秘密 219

親しい森 220

鷺狩 221

* * * 227

ヴァレリイとリルケ 228

夫 芥川比呂志のこと 芥川瑠璃子 230

憶えきれないせりふ

I

東京田端

大正の終り、昭和の初めごろの田端は、東京の外濠線上の住宅地であった。環状線の外は、郊外である。高台だから、晴れた日には筑波山がよく見える。

坂が多い。その坂道も、生垣のつづく閑静な裏通りも、むろんアスファルトなどは敷いていない。後に、動坂から田端駅へ通じる切通しの大通りが出来るまで、田端の道路は舗装を知らなかったといっている。

昼さがり、下駄の齒入れ屋の鼓の音や、羅^ラ宇^ウ屋の笛の音がきこえてくると、のどかさがいつそう深まる。駅の操車場からひびいてくる貨車の連結する音や、裂くような汽笛も、騒音ではなく、冬の夜の沈静をかえって濃くした。

詩人や学者や文士や芸術家が大勢住んでいた。が、そんなことは後から知ったことで、子供だった私たちには、小笹の芽を摘む原っぱも、粘土を掘る駅の裏の崖も、椎の木立の多い八幡様の境内も、いたる所が自由な遊び場だった。私は今でも、椎の木を見ると、あのころの田端を懐かしく想い出す。

(昭和49年12月)

中里幼稚園

よくも一年通ったものだ。田端から、六歳の子供の足でたつぷり三十分。昔は道も狭かった。自動車なんぞは走っていなかった。昔も昔、大正十四年。

途中で恐いのは、菓屋のざんぎり頭の氣狂い婆さん。途中でおもしろいのは、人形芝居や紙芝居。一枚の絵じゃない、人間が、一人一人べつべつに動く仕掛の古風な紙芝居だ。

途中には、奈々子さんの家もある。鹿島さんの奈々子さんの家だ。門の奥の方に、テニスコートが見えて——いや、あれは、テニスのボールの音がしていたのだった。門には蔦が絡んで——いや、あれは中里幼稚園の門だった。

さて幼稚園では、いつでも桜の花が咲いていたような気がする。砂場の上の藤棚には、いつも藤の花が咲いていたような気がする。芝生にいつも薔薇の花の咲いているきれいな庭は、向うの方であって、そこは聖学院の「お姉さん」たちの庭なのだ。

幼稚園では、いつでもオルガンが鳴っていた。弾いているのは、紫の袴をはいた美しい望月先生だ。幼稚園では、いつでもふちなしの眼鏡をかけた中沢先生がにこにこ笑いながら、エス様やマリア様のお話をしていた。中沢先生は、いつも黒い着物を着ていた。

組じゅうで、一ばん背の高いのは奈々子さんだ。一ばん背の低いのはリナ子ちゃんだ。男で一

ばん背の高いのは大造くんだ。一ばん低いのは——忘れた。

ぼくはまんなかぐらい。隣りが、いたずら坊主のマサルくんだ。朝のお祈りの最中に、マサルくんが椅子をガタンと動かして、ぼくに何か話しかけたばっかりに、マサルくんとぼくとは望月先生に立たされた。ぼくは何もしなかったのに。おお、落合マサル君、今いずこ！

二ばんめに背の高いのはデン子さん、やせているのはイク子さん。一ばん元気なのは誠二くん。藤村誠二は大学まで一緒だったが、戦死した。誠二くん、同じ戦争に行つて、ぼくはまだ生きていて、毎年あの北軽井沢で夏を過している、君のお父さんやお母さんと、君のことや、山の木の伸びるのはずいぶん早いものだというようなことを話し合いながら。

この間、中沢先生にひさしぶりにお逢いしたら、「幼稚園のクリスマスで、あなたは三人の博士の役をなさったっけ」とおっしゃった。

ああ、中沢先生、ぼくの役はもともと小さな役でした。第一の羊飼。三人の博士をやったのは、誠二くんと作くんとテツヤくんです。と——そう言いかけて、ぼくは止めた。

同じだもの、幼稚園では。羊飼でも、博士でも、マリア様でも、幼児基督でも、はたまた、羊でも。

それにしても、ぼくは未だに覚えている、あのせりふを。生れてはじめて口にした、せりふらしいものを。「あれあの光をくらんなさい。あの音楽をおききなさい。みんなひざまずいて神様のお告げをききましよう」

それにしても、はるかな国、遠い昔。中沢先生や望月先生は健在だが、時おり、聖学院の薔薇

の芝生を渡ってぼくたちの教室をのぞきにきた赤ら顔のマッコイ先生、今いずこ。

教材の組立て式の子供の家、菜園の赤蕪（あゑ、みんなは家へ持って帰って塩漬にしたりサラダにしたのに、ぼくはコック気取りで弟たちとままごとに使ってしまった赤蕪。遊戯の最中に誰かがおしっこをすると、そこへ灰を撒いて掃除してくれた小母さん、図書室の本や、桜の木にいた毛虫、砂場でぼくが無くしてしまった祖母から貰った昔の磁石、あの風、あの日の光、今いずこ！

昔みんなと一緒に歌った讚美歌——「主は来ませり」を、ぼくはどういうわけだか「シユはシユませり」と思いこんで歌っていたが——、ともあれ、三十六年前、中里幼稚園で、みんなと一緒に無垢な心で歌った讚美歌は、今いずこ！

『五十年の思い出 女子聖学院付属幼稚園』・昭和36年9月

劇場その昔

はじめて新劇というものを見たのは、ちょうど五十年前である。

母に連れられて、「西部戦線異状なし」を見た。エリツヒ・レマルクの作。世界中で大当たりをとった反戦劇であった。

むろん小学四年の子供には、新劇もレマルクも反戦も、分るはずがない。歌舞伎とはまるで違

った写実的な舞台で、戦闘の場面になると、銃声、砲声がとどろき、煙や焰が噴き出し、夜の道をトラックが走る。その大仕掛けにびっくりした。幕が降りても、客席に煙が立ちこめて、動かない。

戦場以外の場面で、憶えているのは、たった一つ、ある兵士の帰宅の場面だけである。

田舎の、たぶん農家の暗い部屋。ほんもののランプの炎が美しい。

老母と娘がいる。娘がせりふを言うと、母が小声で、

「あのひとが、山本ヤスエ」

開幕前に、プログラムでその名を見て、この山本安英という人は男か女か、アンエイかヤスヒデかと母にたずねたからである。

若い兵士が休暇で帰ってくる。ベッドの母親は、病氣らしい。やがて彼女が眠ると、娘が弟の兵士に言う。

「おっ母さんは、ガンなんだよ」

弟がハツとした所で、暗転。

ガンが分らない。母親の正体は鳥だ、というのではなさそうだ。母にたずねる。

それやこれやで、この地味な、小さな場面が、強く印象にのこったものと見える。

早稲田の演劇博物館が出来たのも、半世紀前である。昨年、「演劇博物館五十年」という大型本が、記念として出版された。